

(添付資料1)

最優秀賞

文部科学大臣奨励賞

「虫の声に耳を傾ける文化」

福島県会津若松市立第一中学校

三年 松 本 莉 早

あなたは鈴虫の音色を聞いて何を感じますか。

「りーん、りーん・・・」と鳴くその音に、私は秋の気配を感じて、とても癒されます。しかし、この鈴虫の音色は日本では美しい秋の音色とされていますが、他の国ではそうではないようです。

日本は、海に囲まれ、四季を持つ自然豊かな国です。そのせいか、日本人の会話や文章の中にも自然や四季を用いた表現がよく使われます。

特に、物や動物の発する音を言葉に表現する「擬音語」というものは、日本語の中に数多く存在し、その数は英語の五倍近くにもなるといいます。

私の祖母は茨城に住んでいて、電話でよく天気の話になります。

「会津も雨みたいだね。どのくらい降っているの？」

「朝からザーザーだよ。そっちは？」

「こっちはポツポツくらいだよ…」

日本人であれば、この会話を聞いて大体の雨の様子が分かるでしょう。

その他にも静かに雨が降る様子を「しとしと雨が降る」と言ったり、また、強い風が吹くことを「ビュービュー風が吹く」と言ったりもします。

日本の有名な作家、宮沢賢治や、江戸時代の俳人、松尾芭蕉も作品の中でたくさんの「擬音語」を使い、さらに情緒豊かな作品にしています。

なぜ日本人は西洋人に比べて「擬音語」を多く使い、遠い昔から現在に至るまで語り継いでいるのでしょうか。

それは「日本語脳」と呼ばれるものに原因があるのだそうです。人間の脳は芸術をつかさどる「右脳」と、言語をつかさどる「左脳」に分かれています。しかし、ある実験結果によると、日本人も西洋人も音楽や雑音は「右脳」で、人間の話す声などは「左脳」で処理されたのに対して、日本人は、虫の声や動物の鳴き声、波の音や風の音を「左脳」で処理し、西洋人は「右脳」で処理したということです。つまり、日本人は、虫の声や波の音などの自然の音を、音ではなく言葉としてとらえるということなのです。

同じ機能を持った人間が、育つ環境によって、脳の反応を変えてしまうなんて私にはちょっと信じられませんでした。

しかし、ある日、何気なくテレビを見ていると、「外国人に虫の音色を聞かせて反応を見る」という内容の番組が始まりました。虫の音色を聞いたほとんどの外国人は、一様に顔をしかめて、「不快な音」と言っていました。

私が住んでいる会津は、冬に雪が降ります。私は擬音語の中でも、雪が静かに降り積もる様子を表す「しんしんと雪が降る」という表現が大好きです。実際、雪が降っている時は何の音もしなくて、ただただ静寂です。物の音を言葉に表現した「擬音語」なのに、音がない雪の降る様子をどうして「しんしん」と表現したのでしょうか。

それは、日本語脳など関係なしに、私達日本人は、心で物音をきく習性が昔から備わっているからだと思います。昔の人は、雪の降る夜の静寂の様子を「しんしん」と心で聞き、表現したのでしょうか。

鈴虫の音色も、ただ虫が鳴いている音と受け止めるのではなく、

「あ、鈴虫が鳴いている。もう夏も終わりなんだな・・・」

と、心でその音を聞いているのです。

虫の声に耳を傾ける文化・・・

私達は、桜が散っていく様子も、葉っぱが風に吹かれている音も、雨が降り出した音も、それぞれささやいている言葉のように受け止めることができます。これは、お母さんのお腹にいる時から、大切に大切に育まれてきた日本人の感性のようなものなのではないでしょうか。この世に生命を持つ全ての声がきける私達の文化は、これからも決して無くしてはならない文化だと思います。これからも自然の物音に耳を傾け、親しみ、豊かな「擬音語」を作り出す情緒的な感性に誇りを持ち、さらに磨いていきたいと思います。

そして、いつまでも豊かな自然の音が感じられる美しい日本でありたいと願います。